若　者

アリスの世界

藤　井　政　俊

ここ数年来，書くものといえば，学会発表の要旨や論文ばかりで，このコラムに適するような，ちょっと気の利いた文を書こうと思うと，はたと困ってしまう．はっきりいって，これはと思う題材の蓄積がないのである．日頃，近視眼的な生活ばかりしているためであろうが，いささか情けない気がしてしまう．とあるイギリス雑誌の日本支局長が新聞に書いていた日本人研究者に対する批判を，地でいってしまっているようである．

その少ない中でも，つい最近，一冊の本を読んだ．この本を読んだのは，これで二度目である．最初に読んだのが中学時代であり，実力不足だったせいか，余りたいした興味が涌かなかったように思われる．ところが，今回の読書ではかなりいろいろな発見があり，非常に気に入ってしまった．（適した時期に読まなければ，その本当の面白さが解らないのは，何もこの本に限らず，結構多いのではないだろうか．例えば，夏目漱石の本，特に「我輩は猫である」などはその最たるものであろう．この本は確か，中学生程度の推薦図書になっていたと思うが，それにもかかわらず，登場人物同士の会話はかなり難解であるため，大学時代に読み返してみて初めて合点がいったものである．）

さて，この本とは，ルイス・キャロル著の「ふしぎの国のアリス」である．さすがにこの物語は，名高く，翻訳本も，文庫本を含め数冊出ている．角川文庫版の特徴は，その挿絵がジョン・テニエルのもの（彼の挿絵はこの物語が1865年に初めて出版されたときから付いていて，現在でも，英語版は勿論のこと，他国語に訳された場合でもほとんど付いているほど，この物語にはなくてはならないものになっている．）ではなく，和田誠が例のタッチで敢えて挑戦したものになっている．また東京図書からは，サイエンスの数学ゲームで有名な，マーチン・ガードナーがこと細かに付けた注釈入りの本が出ている．またこれらとは別に，子供向けの絵本も数冊出ているようであるが，単なるアリスの冒険談的な話に終始しているのは，仕方のないことであろう．本来なら原文で読むべきであろうが，貧弱な英語力や，英国人共通の文化を持ち合わせていないなどのため，今回は，多少注の付いた，また，訳にも苦労の後がうかがえる，講談社文庫版を選んだ．

「ふしぎのくにのアリス」の特筆すべき点は，それまでの童話が，道徳的，教訓的な意味あいを多く含んでいたのに対し，もっぱら読者を楽しませることに主目的をおいた話であることである．すなわち，世界の児童文学の歴史で「ファンタジー」のジャンルを切り開いた原典と評されているのも，もっともなことである．

物語の中には，様々な登場（人）物が出てくる．一番有名なのは，物語の冒頭に登場する，チョッキを着て，懐中時計を見ながら走っている白うさぎである．これに代表される，実在の動物に始まり，物語の中でひんぱんに現れたり消えたりする「チェシャーねこ」（この猫は，そののち，シュレディンガーのねこになり，不確定性原理の実験の際に，実験動物として再登場する．），三月うさぎ（気違いの代名詞，三月はうさぎの交尾期），にせうみがめ（イギリス料理のうみがめスープは非常に高価なので，これのにせものとして，小うしの頭などを代用して作った「にせうみがめスープ」がある．これからもじって，頭と後ろ足が小うしで，他の部分が，亀の格好をしている）などや，トランプの王，女王，兵隊などである．これほどの想像

*藤井政俊（Masatoshi FUJII），大阪大学産業科学研究所河合研究室，大学院在学中，理学修士，無機結晶材料

力には，感心してしまう．

現在，この様なファンタジーの世界を描いている作者の一人に，J. R. R. トールキンがいる．彼の「ホビットの冒険」やその続編「指輪物語」（どちらかというと，こちらの方が本編と呼ぶにふさわしい）などは，イギリスファンタジーの正当な継承作品であろう．これらの作品中でもやはり，「アリスのふしぎのくに」ほどの不思議さはないにしても，まだ，人間とドワーフ，エルフらの妖精が共に生活していた遠い昔に，ホビットの国や，冒険に出かけた国々，更に登場するのはさまざまな種族たちを，想像力豊かに構築している点で，非常に娯楽性にとんだものになっている．それに対して日本の童話の場合，動物や，世の中に存在しているものが，擬人化されているのがせいぜいであって，イギリスファンタジーのように新たな種族，新たな世界を生み出せないでいる．日本において，神話の時代から，黄泉の国を除いては，人間以外の国がほとんど存在していないことからも解るように，その様な発想の習慣がなかったためと思われる．そういったことから，日本においては，なかなか注目すべきファンタジーが世に出てこないのであろう．

アリスの中の中心的な面白さのもう一つの要素として，「ことばあそび」があげられよう．これは，日本語で言うところの，だじゃれである．担し，かなり巧妙に出来ている．例えば，「気ちがいどうしのお茶の会」では，時間を擬人化して考えている（Tを大文字で書いてある）ふしぎのくにの登場人物（帽子屋）と，時間を単に概念としてしか捕えていないアリスとの間で以下のような混乱が生じている．音楽の場合の拍子をとることと，時間をたたく（どちらもstrike time），また，拍子がめちゃくちゃなことと，時間を殺す（どちらもkill time）というふうな具合いである．以上の様な食い違いが数限りなくあり，更に，食い違ったままで，すなわち，二人が異なった概念を保ったままで会話が進んでいく場面などは，大変きょうに乗ってしまう．

「ことばあそび」では，日本においても伝統的に続いている．興津要編「江戸小咄」の中ではいたるところにちりばめられているし，現在でも，テレビ，ラジオで，また，日常会話においても頻繁に聞く．「アリス」に出てくる「ことばあそび」の水準は，果してどの程度のものであろうか．外国語であるがゆえ，なんとも批評のしようがないのが残念である．講談社文庫版では，この点に関して，かなり気を使って訳してはあるが，英語におけるその様なニュアンスを日本語として伝えるのは，ほとんど不可能である．（私の場合，注釈を見て納得するぐらいのことしか出来なかったのではあるが．）

更に，この「ことばあそび」の発展として，いわゆる「本歌取り」もほうぼうに使われている．すなわち，イギリスで当時周知になっている，賛美歌の歌詞や，桂冠詩人が作った教訓詩などを，かなり好きかってに書き換えてしまっている．これらのおかしさを理解するには，本歌を知っているということが必要条件だが，この場合も，とてもそこまで手がまわらず，殆ど理解することが出来なかった．

共通の土壌を持つことが期待できる日本においても「本歌取り」は盛んに行われていたようである．古くは枕草子における「香炉峰の雪」が代表的な例であろう．ところが最近では，日本の共通の土壌として存在していた「本歌」がしだいにその共通性を失いつつあり，話のふぐらみが狭められてきているのではないかと，残念に思う．

以上のように，アリスの話を読んでみると「ことばあそび」の点では，日本においても古来から存在し，比肩しうるものになっていると思えるが，前半で述べたファンタジー性がないために，もう一歩踏み込んだ想像性にじゃっかんの問題が現れているのであろう．長谷田泰一郎先生が書かれていた[1]，第一線の研究と第一流の研究の違いもどうやらその辺の所に根ざしたものなのだろうか，と思いつつ筆を置くことにする．

文　献

1）長谷田泰一郎：日本物理学会誌　41（1986）533